

史料館報

第 20 号

昭和49年 3 月

史料保存問題と研究者

井上勝生論文にふれて

色 川 大 吉

(東京経済大学教授)

私は地方史家としてこれまでかなりの文書群をあつかってきた。はじめて三多摩の農山村の調査に入りこんでから十七年間、どれだけたくさん数の旧家の土蔵をあけてみたか分らない位だ。おそらくその間には数十万点の史料を読んだであろう。しかし、私の尊敬する一研究者によると、近世文書はいまなお二十億点も三十億点もあろうというから、私の読んだものなど、まさにその九牛の一毛で、研究対象とする史料の全体性を云々する資格は私にもなさそうである。

それでも一つの例は挙げてみよう。いまから十余年もまえのことだ。私は困民党関係の史料を追って三多摩

の戸長役場をさがしあるいていたが、たまたま沼謙吉氏に案内されて南多摩郡恩方村旧役場(現八王子市恩方支所)の倉庫に入ってみた。その村は、きだ・みのる氏が「気違い部落」と命名して有名になった山村だが、明治時代には製糸や織物業で栄え、困民党もかなりの数が発見されている。山奥のためか、理解者がいたためか資料の保存がきわめてよく、明治初年から昭和初年までの村役場の各種台帳の綴りがほぼ完全な形で残されていた。

さて、私たちはそのトラック一山もあろうと思われる膨大な資料をまえにして、まず気の遠くなるような絶望感を味わう。たった一つの村の、

目 次

史料保存問題と研究者……………色川大吉……………(1)頁
井上勝生論文にふれて……………
大川家の樟腦製造……………榎本宗次……………(4)

新取史料紹介……………
その他……『史料館報』講習会予告・閲覧業務停止予告など……………(8)

公文書だけでこの量だ。その上、この村の旧家の土蔵に眠っている私文書の量を考えたら、私のように七郡三百カ村にまたがる武相困民党を研究しようとする者はいったいどうしたらよいのか。この山の中から、ただ困民党に関係あるものを引っぱりだす「抜き取り調査」だけでは、当時の民衆の生活構造や意識構造を理解できないことなど分りきっている。

全体を通覧することはもちろん必要だが、さらに、研究を公開するため文書目録を製作するのにこしたことはない。しかし、金もなく暇もなく、協力者もなく、教育労働の重荷まで

負っている一般研究者が、そんなことを一々やっていたら七十の老翁に達しても尚、一困民党の研究さえ成遂できないではないか。ついでに言えば、その恩方村の明治の戸長役場の台帳は、なんと八十八種類の多きに分類されていたのである。

なぜ、私が最初にこんなことを書くか。それは「史料館報」第十九号

で国立史料館員の井上勝生氏が、私の第二回地方史研究全国大会での発言をつかまえ(それも直接にはなく雑誌の要約だけから誤解して引用し)、いさ、か揶揄的な調子で、おまえらの史料抜き取り的な研究態度が、かえって生体解剖のような史料目録を要請しているのではないかと批判しているからである。

私は「史料目録」のことではなく違う趣旨の発言をしたので、井上氏の批判は八ツ当たりとしてか取れないが、議論を面白くするために対立的に書きたいと思う。

まず、人間史において完全な史料など存在しない。過去に起った事柄の資料の重要なものの大部分は失われ、また、その本質的なものの一部分が不完全な形で偶然に残されたにすぎない、という認識こそが、史料問題を考える場合の前提である。真実への全的な追求に苦しんだ人間であればあるほど、この第一歩での躓きに苦悶したはずだ。研究者として

の自己の欲求への絶望と抑制、完全主義への断念は文書史料学の前提である。

文書史料など歴史資料のほんの一部にすぎない。そのまた一部分をたとえ完全に目録化したところで、それほど大きな意義があるわけではない。それにもかかわらず私たち研究者は不完全な目録を個人的にも作りつけてきた。なぜか。全体性復原への熱望を抑えがたかったからである。それゆえに、それ以前に、私たちは、その不完全な史料が、いつどのような状況下に、どのような保存の状態で、どのような形に仕分けされ、あるいは、束ねられて出てきたのかを詳しく報告することをしてきた。それは史料の残存がそもそも恣意的で不完全なものであり、それを残そうとする動機によって異なるさまざまな作爲が加わったものであるという認識に立つからである。つまり、史料保存の動機の要素や、史料継承上の作爲を捨象してはならないと考えるからである。

たとえば権力によって追求された農民一揆の指導者がどんな形で史料を残すか、子孫がそれをどんな形で守るかは、その史料自体の内容に劣らぬ重要性をもっている。私が地方

史研究大会の発言で、文書を常識的分類法で分類してしまう前に、それが発見された全体的状況を記録することが史料解説上重要だと力説したのはその意味である。たとえば五都市憲法草案は深沢家の土蔵の二階の梁の下の一包のふろしきの中に「整理」されてあった。それをその草案と同じ包みの中から発見された会合のメモ類や参考図書や詩稿録や書簡や回状と離して、一、法制―建白書の項目、二、刊行図書関係、三、雑の部の書簡類、四、雑の部の詠草類などに、いきなり分類してしまったら一体どうなるか。そこで文書目録は少なくとも二通りは必要だと私は言いたい。一つは個性的な目録で、ふろしき包みの中を一項目（憲法起草関係）とするような分類をし、二つは常識的分類法による通常目録をつくる。この中間的な試みが最近、東京経済大学図書館で刊行した「深沢家文書目録」の分類法である。

通常目録だけでは困るという例は多い。私は近世史家や史料館員が整理したものの中、とくに「雑」の部に注目するが、それは何でもかんでも手に余る個性的なものは「雑」の部の中に叩きこまれていることが多いからである。とくに市町村史など

の史料目録は、その町や村の個性を興味深く表現する個性的な目録をも合わせて作らないと、かんじんの自治体住民の役には立たないであろう。そういうことは井上氏のいう研究的な問題意識があれば解決できるということではなく、地域住民の歴史意識をもあわせて理解しなければできないことである。

しかし、歴史家の任務は史料目録家のそれではないのだから、将来はこれは分業してゆかなくてはならない。ただ現況では目録づくりは、その大部分が依然として地道な研究者の犠牲によって支えられている。国立史料館とか文書館とかにいます、どうもこういうことが見えないらしい。「史料目録」のような骨の折れる地味な下積み仕事をしているのは自分たちだけで、研究者なんていうのは自分たちのつくった「史料目録」をたゞ利用している特権的な人種にすぎない、と考えがちになるのである。井上論文にもそうした調子が看取される。

しかし、井上氏はまだこの方面での経験が乏しいらしく、誤認している。私などは史料館や文書館のお世話になることなど唯の一度も考えたことがない。目録は自分で作るもの

だときめてきた。あるいは私たちが協力して個人の所蔵家や地方自治体の編纂室や私立大学の図書館や研究室で作るのが大部分だと思ってきた。それは多分に犠牲的な仕事であった。しかし、その犠牲の上に江戸時代の研究も明治時代の地方史研究も成り立ってきたものだと考えてきた。そういう人間からいわせれば、国立史料館や文書館などというものは、一つ二つの「本格的な史料目録」を長い時間をかけて作るより、それら何万件とある全国各地方の不完全な史料目録の「所在目録」でもまず作って、私たちのように孤立分散している多くの地方史家に、連絡の便宜を計ってくれるのが当面のサービスではないかと思っている。

井上氏によれば、私たちの「調査や研究の発展段階」は、まだ「抜き取り」調査の段階であり、極論的に云えば「保存なき研究」の段階である。そうである。大学院位のかげだしの研究者が自分の論文づくりを焦って「如何におもしろい文書を書き取り」に要領よく、抜き取る「か」という「段階だ」というのならば分る。しかし、それを明治大学の木村礎教授のような学者までも含む近世史家一般の水準だというのはおだや

かでない。考え直してほしい。「抜き取り」専門屋がどうして私費をさき多大の暇をつぶしてこれまで多くの「史料目録」を作製してきたであらうか、と。

「抜き取り」調査はお説の通り、たしかに文書の原型を破壊する恐れがある。そしてそういう例も多い。

したがって今の一般の研究者は史料の「保存」を考えない「研究」にとどまっておき、史料館の人びとは「研究なき保存」に墮しているとし、この相互補完的な状況が現況であるという井上氏の認識は短絡にすぎるので訂正されたい。

一般国民に奉仕する方法をも真剣に考えなければならぬまい。それに対する内側からの対応と反乱が井上論文であり、さらにそれを「史料館報」の編集者は論争にと発展させようとしたのであらう。私は行きがかり上、井上氏に對立するような意見ばかり述べたが、実はこの「反乱」に賛同し、加担する一人である。私の攻撃の相手は井上氏でも国立史料館でもない。「抜き取り」ではなく「抜き盗り」までして自分の業績主義を實現しようとするニセ・アカデミストたちと、その背後にいる官学のボスや国家官僚共である。この連中こそ昔も今も地方史研究者の共通の敵だったのである。

よって何が失われるか、村落調査を一度でもやったことのある人なら直ちに分るのであらう。

「抜き盗り」程度のことなら研究者としては当然であり、決して文書の原型の破壊にはならない。だいいち歴史研究というのは必ずしも十分な文書史料がなければできないというものではない。史料だけでは意味をなさない。研究者の現代的問題意識が、死んでいた史料に光をあてることによって史料の命を蘇生させる、その火花の散るような内面のドラマが、外観的には「抜き取り」調査と見える行為の中にも演じられている。井上氏も無数といってよいほどある史料（「事実」の記録）の中から「歴史的事実」として評価できるものを選別する作業をまで「抜き取り」といって否定するわけではあるまい。

最近、わが国では全国的に地方史研究がさかんである。おびただしい数の郷土史家と各市町村の中・高校歴史教師と自治体史の編集委員と全国地方大学の研究者などが中心となつて、埋もれていた私文書、公文書や民俗資料などを大量に発掘し、地域史を書き進めつゝある。その過程でそれらの保存と利用のために各種「史料目録」の作製も行われている。その盛況ぶりは有史以来の花盛りといつてよい。日本の出版界の歴史ブームはこのために永続しているのであり、歴史研究や目録作製はもはや一部の玄人の独占物ではなくなりつつある。このときに国立文書館や史料館は何をしたらよいのか。旧式のアカデミズムの発想や方法にとらわれて格式ばつたことを言っているのはなるまい。高い所から物をいう一部専門家のためのサービス機関に墮していてもなるまい。質的に高まることはもちろん必要だが、それと共に

最後に原史料の保存場所についていえば、それが発掘された町や村の公共的な場所に置かれることがもつとも望ましい。それはその史料を産んだ風土や住民の社会とその史料との有機的関連を重視するからである。ある村落史料はその村落景観と切り離してしまつては大きな意味を失なう。とくに緊密な共同体生活をしてきたある家の文書を、その共同体との関係を無視して遠隔地に運び去りそれを形式的分類法にかけたら、どんなことになるであらうか。それに

私は地方の原史料を保管条件が良からという理由で、県立文書館や国立史料館などに無原則に持ちこんでしまうことには反対である。そうした機関にはコピーか文書解説のついた史料目録を整備しておけばよいのだ。そうでないと、地方文化はその創造的な源泉を涸らされるし、歴史教育を現場において行なうことも困難になる。地元で受入れ態勢が整つたら、これまで収奪してきた地方文書をも返還するといった方針こそ望ましい。その場合、国の史料館などは、民間で試みられている独創的個性的な文書整理の方法や、外国の文書目録の作り方などから積極的に学んで、国情に合う幾通りものサンプルを作り、情報不足な地方の人びとに示唆をあたえてほしい。もちろん、現状ではこうしたことがいかに実現困難であるか承知している。しかし、そうした困難に挑戦しながら論議をたたかわせてゆくことが今ほど必要な時はないのである。

大川家の樟脳製造

榎 本 宗 次

史料館所蔵史料目録第二十二集として、伊豆国君沢郡内浦長浜村大川家文書を扱った。渋沢敬三氏の蒐集された「内浦史料」はもとアチックミュージアム（後に日本常民文化研究所と改称）の収蔵するところであったが、色々な経過を経て当館に委譲されて今日に到っている。周知のようにこの「内浦史料」の大部分は『豆州内浦漁民史料』上中下三巻四冊として出版され学界に多大な裨益をなし、この「史料」にもとづいていくつかの論稿が発表された。（なお昭和四八年一月、三一書房より『日本常民生活資料叢書』の一部として三巻もので複製された）。この「史料」の根幹をなすのが「大川家文書」であるが、目録第二十二集では「史料」に掲載された分については史料番号を同一にして、この「史料」の索引をも兼ねるようにした。また「大川家文書」の内容については目録の解題のところで、各項目ごとに簡単に説明を附した。

ところで、この刊行に先だって大

川家の現当主大川四郎氏を訪ねた。

今に残る長屋門からの眺めはまさに絵に描いたような美しさである。静かな海は庭のように眼前にひろがり富士が正面に聳え、島が点在し、鷗が飛ぶといった、我々が絵や写真やどこかで何十回も見たとような「典型的」な光景である。「夏ハ笠、冬ハ足袋ヲ用ヒ」たぐらいの出立ちで「聊寒著ノ愁モ無」かったかどうかは別として、津本の大川氏は、ここで三百年の間、裸足の網子たちを勵しながら、漁業経営を続けていたと思ふと、堤防や砂浜のあたりに屯している人々も津本や網子の末裔のようにみえてくる。

大川四郎氏は十七代目にあたるがそれより五代前の大川小文治が漁業経営に加えて樟脳製造に精を出すということがあった。津本・網度持としての大川家については、いくつかの論稿があるが、樟脳製造に従事した大川家については、あまり知られていないので拙文では、その一斑にふれてみることにする。

近世における樟脳製造は、はじめ薩摩よりおこり、正徳年間にはすでに藩の専売となり、唐・蘭貿易における主たる輸出品になっていたが、宝暦年間には土佐藩でも製造が開始されたという。村野守治氏の「薩摩の樟脳」（日本産業史大系8所収）によれば鹿児島藩における樟脳製造は寛永年間にはじまり、すでに寛永十八年にはオランダへ輸出していたという。そしてその製造法は朝鮮人鄭宗官によって伝えられた焙烙法で

「四、五升焚の羽釜の上に鉄桶をたて、桶のなかに桶の木片を入れ、その上に径一尺三寸、深さ一尺二寸五分の素焼鉢をふせ、五日ほど焚くと鉢内に樟脳が付着する」という方法であったという。宝暦年間の「日本山海名物図会」に掲載された「鉢伏法」も原理的には焙烙法を引き継いだもののようで、その説明のところに「釜のふたは鉢也、釜と鉢との間を土にぬりて、いきの出ざるやうにする也、其ふたへたまりたる露則樟脳なり」とある。これらの樟脳製造のその後について江頭恒次氏は次のように述べている。「維新以後はこれらの藩業は消滅したが、さきに発明された土佐式製脳法による製造が、四国・九州をはじめとして紀伊・駿河・伊豆の各地に勃興し、日清戦争後台湾が日本の領土になるとともに、かわに産額は増大した。」と。

以上、近世の樟脳製造について垣間見たが、大川小文治が樟脳製造をはじめたのは維新に先だつこと六三年前の文化二年のことである。このことに関係した文書は凡そ二五〇通にのぼり、うち八〇通ほどが書状である。その内容は私的な文言もみられるが、大部分が樟脳製造という薬園御用につながるもので、しかも前後の達・願書・届などに密接に関連している。目録では夫々を別項目にせず、年代順に配列してある。これらの史料によれば文化文政・天保にわたる約三十年代が大川家の樟脳製造に従事した期間である。

そもその切っ掛けは幕府が享和二年暮、伊豆下田における樟脳製法を命じたことにある。小文治は翌年の十月、樟脳製造の伝法を願ひ出、御薬園医師渋谷長伯の弟子土岐新甫より下田製法所で製法方を伝授された。小文治は早速頑丈な製法所を建鉢も注文してつくらせた。土岐の同僚近藤金之助に宛てた書簡の一節に「都合今戸ニ而四十八調申候得者船中ニ而痛ミ等も出来仕候得共鉢ハ沢山ニ有之、乍恐私百余歳迄長命仕、

製方いたし候共一代不自由有之間敷大悦仕候」とある。「日本山海名物図会」の「樟腦製法」には「小屋の内に廿四釜をかけ二通にする也、一通に十二釜づ、せなか合せにして」とあれば、その二倍分の鉢を調製させたわけ、その意気込みのほどが窺える。文化二年二月には樟木古根などをもって試験的に製造した手本樟腦を御薬園方に差出し、樟腦上納を願出、同時に伊豆君沢郡内の樟木の買請方を申請している。ついでその年の十月より翌年の二月迄に樟腦三百斤(毫斤ニ付銀四匁二分三厘九毛)を「御買上直段ニ毫割何卒直之御直段を以上納仕度」と申出、文化三年四月には御薬園に上納すべき御用樟腦式樽(三二貫、斤にして式百斤)を品川宿迄継送している。それより江戸飯田町小松屋に搬入しそこで「干乾袋」に入れ、しかる後御薬園役所に納入した。しかし「年々村々継立之儀世話ニも可有」ということで文化七年頃には、船積で品川まで、それより「はしけ舟」で飯田町へ届けるようになった。ただし船積の方は延着しがちなので、急用の節は前々のごとく三津村より継立、あるいは小舟で沼津宿まで送り、それより品川迄継送している。

一方、薬園役所では文化三年五月君沢・田方両郡の村々に通達し「樟木売払候者小文治江相対之上売払」うべきことを命じた。文化四年九月の史料によれば、柏谷村修禪院・同檀方祐八が樟一本を小文治に売、その代金壹両貳分を請取っている。また懸案の河内山御林樟木植付の件も具体化し、文化三年六月小文治は近藤金之助のもとに依じて御林三万坪開発の「御入用積書」を提出しているが、それによれば樟苗木二千四百本の代銀二八八匁、植付賃銀三二〇匁計六〇八匁であった。実行に移されたのは、このうち三千坪で樟苗一五〇〇本である。文化八年九月、加茂郡の忠右衛門なるものが金五兩でその開発を請負、小文次より内金を受取っている。文政四年十月、小文治が御薬園役所に提出した報告によれば、長四、五尺より一丈・廻り三寸より七寸までの樟八五〇本とあるから約十年にして苗木の半分以上が成木したことになる。

この間たびたび御薬園方の見廻りが河内山御林に赴いている。すなわち文化六年には渋谷長伯・小林勝蔵・梅沢新十郎・近藤金之助等都合一八人、ついで文化八年二月小林勝蔵・梅沢新十郎等、また天保三年には「渋谷長伯御預御薬園向改正取調御用」として姫君様方御用人格浜御殿奉行木村又助・森山安芸守組与力番町御薬園出役田嶋良助等の一行が出向いている。

小文治は薬園御用出精により文化十年二月、式人扶持を給されたが、更に「相応之名目被仰付被下置候様」願い出、文化十三年には豆州君沢郡河内山樟木御林守を仰せつかっている。これに先だつて近藤金之助・梅沢新十郎の両名にたびたび名目取得のための助力を頼んでいるが、その頃の書簡の一部に次のようにある。「乍恐私儀最早六十二才ニ罷成申候得者余命も難斗老衰仕候義ニ御座候得者毛頭御威光を以、權威を振り名聞ニ仕候心底ニ而ハ無御座、折角相仕立候樟無難ニ相育立、末々ニ至り御用ニ立候様ニ仕度、……名目も無之候而者他之者之了簡ニ者するきやう者之様ニ存候哉ニ奉存候間、見廻りニ名代遣シ又者人足等差出置候儀も何角心配仕候ニ付無余儀御願申上度云々」。大川四郎左衛門要助の養子となり十三代目を継いだ小文治(田方郡塚本村渡辺丈右衛門悻)の胸底にはたえず「先祖より累代小代官相勤、享保年中迄者苗字帯刀仕候家柄」のことがあったようだ。文政十

二年には悻四郎左衛門が御林守跡役となり、翌年八月、御薬園懸り之衆等へ御礼廻りのため江戸に登っている。

しかしこの頃すでに御用樟腦の製造は伸び悩みの状態にあった。文政七年四月、四郎左衛門から小松屋三右衛門に宛てた書状には「御用樟腦年々式百斤宛御上納仕候處近年(父)及老衰、納高程者出来兼候間、不足之分ハ貴殿方ニ而買上納ニ相頼、毎年無恙御上納仕来候」とあるが、買上納せざるを得なかったのは父小文治の老衰のためばかりではなかったようだ。天保四、五年頃より「遠方之御薬園之儀格別之御益ニ不相成候事故」次第に返地の方向にむかい大川家の御用樟腦の製造も中止せざるを得なくなった。

なお大川家では御用樟腦を製造した残りの材料で蚊遣りなどをつくっていたようで「御免製香 蚊遣 樟葉香 樟腦木 御伝法御樟腦製法所 豆州長浜村 多景館修合」なる能書が残っている。蚊遣・除湿・解毒の効能のほか「煙氣甚舖目にし候茂返而目薬に相成少も障に相成不申候」などと記したこのチラシは江戸日本橋青物町の売弘所相模屋忠左衛門方で作成したものである。

昭和四八年度 新収史料紹介

出雲国 松平家文書（追加分）
松江

本文書は「御上京一途」の表題をもつ二七冊の編纂物と一四枚の絵図である。内容は、弘化四年九月の孝明天皇即位式に幕府の正使として派遣された松平家九代松平斎斎が、正使に任命された同年正月から、翌五年五月に帰任するまでの関係書類を二一の部類に分けて編纂したものである。一五は京都までの往復旅中を含む全期間の基本書類、六は各種公式文書、七九は進物・答礼物、十は御内用留、十一は行列帳、十二は応接の飾付と献立、十三は御供惣名前、十四は条目・御触、十五は十八は御用状留、二十・二十一は宿割である。ほかに御所や所司代宅などの絵図が添えられている。

なお、本文書の主体をなす同家文書は、昭和二四年度に当館が収集しすでに整理を完了して『所蔵史料目録第四集』に収録済みであり、その中に本文書の目録一冊が含まれている。今回、同家のご好意によって当館が譲渡をうけ前記史料が追加収集できたことは、利用上の見地からもありがたいことであった。

（原蔵者）東京都世田谷区瀬田
七一一 松平直国氏）

⑤ 山城国 最上屋喜八家文書 京都

紅花は近世を通じて出羽国村山郡地方の主たる商品作物であり、阿波藍とともに染料原として重要な位置を占めていた。最上紅花流通史の研究家今田信一氏によれば、村山郡の紅花は紅花撰方仲間・糸間屋兼紅花荷物付商・紅花荷宿等によって取引された。このなかでも量的に取引量の多かったのは仲介業的機能を濃厚にもつていた紅花荷宿で、最上屋喜八や近江屋佐助らがそれにあたる。このうち最上屋の方は京の中村屋善兵衛をはじめとする四〇余名の紅屋と取引があり、いっぽう長谷川吉郎次・佐藤利兵衛・福島治助・市村五郎兵衛ら山形商人から、この荷宿に出荷した紅花は莫大な量にのぼった。

最上屋喜八家の主たる文書は京都総合資料館と山形大学附属郷土博物館の二ヶ所に所蔵されているが、今回撮影したのは後者の分であつて文政一一年から明治一五年にかけての簿冊類である。その内訳は紅花売代金帳一八冊・紅花仕切差引帳六冊・荷物高合勘定帳一二冊・金銀出入帳三冊その他諸国内帳など計七七冊

である。現蔵者住所（山形市小白川町一の一四の二）（三〇リール）一九、六〇四コマ）

⑥ 京都市 蜷川家文書

室町期に隆盛を誇った蜷川氏一族の歴史、同族系譜については、坂井誠一「遍歴の武家」（昭三八・吉川弘文館）、蜷川親正編「蜷川家諸流大系図」（昭四三・蜷川の郷土史所収）、その他蜷川親正氏の膨大な調査研究資料に譲る。本文書は、丹波蜷川氏の系統に属し、近世には、多く京都東寺公人（あるいは惣寺代官）を勤め、明治初年、新政府制度調査御用掛、のち内務省博物館御用掛として活躍、美術史の分野でも令名を残した蜷川式胤をも生んだ京都市の蜷川家の、ぼう大な所蔵文書の一部を収録したものである。今回は、戦国末・近世中期の同家土地・相続関係者若干（約一七通）のほかは、その大部分は東寺公人としての、寺領支配に関する「年預方日記」をはじめ、寺領高帳・年貢取納帳、寺務・寺制・役僧関係に及ぶ比較的まとまった史料を収録するとともに、式胤の明治二四年頃の日記・手控類、「古器物記」（全七冊）ほかの美術関係書の基本史料と思われるものを

収録した。ぼう大な所蔵史料の仮目録を作成したが、なお今後の詳細な調査を実現したいと思っている。本文書の複写に当っては、同家の格段のご配慮があったことを付記し、謝意を表したい。（現蔵者）●京都市南区八条通大宮西入蜷川親継氏。蜷川親正氏管理。総点数八三冊・二七通。五リール三、〇九〇コマ）

⑦ 千葉県 岡谷家文書 船橋市

本文書の一部は、すでに昭和四四年度にマイクロフィルムにより収集した。（本誌第10号14頁参照）今回は前回欠本であつた「岡谷文書」稿本一・三を補ったほか、西南戦争の実録・見聞記事を中心とする明治一〇年代の重要事件に関する史料を取めた岡谷繁実の自筆草稿本「岡谷繁実聞書」（全一〇冊）、「岡谷繁実年譜」を中心とする岡谷氏関係家譜類（いずれも繁実自筆）に重点を置き、岡谷氏所蔵本のうち、前回収集残りの分を収録した。前者は、繁実が修史館御用掛在勤中の明治一四年頃に、一部はその職務上の目的から収集した記事と思われる。数種の年譜類も、単なる年代記ではなく関係文書類を多く収めており、前者と共に今後の精査が待たれるものであ

ある。「繁実日記」、「寒香園記」

前記「岡谷文書」等は、前回収録分

や館林市立図書館保管「浮世の夢」

等と共に、幕末—維新期の政治史料

としてはもとより、修史館時代や在

野史家としての繁実の活動をうかが

わせる興味ある史料を多く含んでい

る。(現蔵者)千葉県船橋市夏見町

二一九五—二 岡谷繁雄氏。収録点

数全三冊。四リール—二六八コマ。

群馬県沼田市土岐氏家中由緒書

本文書は、第一史料室による「大

名文書の所在調査」の一環として調

査・収集したもので、東京渋谷区在

住の土岐章氏が、その所蔵文書(当

該室において調査・整理済み)の中

から沼田市に寄贈されたものである。

全体の構成は次のとおり。

宝暦六年家中由緒書 全四冊

明和五年同追加

天明七年同右

文政三年同右

嘉永二年同右

寛政元年三箇寺由緒書 一冊

文政三年同追加

嘉永二年同右

見るとおり、家臣団系譜は前後五

回にわたる系譜書上を編纂したもの

て見当らない現在、同藩史研究の基
本史料の一つとなりうるものであろ
う。なお三箇寺は、不動院・勝善寺
および増円寺現住に関するものでは
ある。本史料複写に際してはとくに土
岐章氏のご高配をいただいた。記し
て謝意を表する。(現蔵者)群馬県
沼田市総務課。収録点数全二六冊。
六リール—三、七四〇コマ)

上野国 萩原家文書

本文書は、当館が『史料館所蔵史

料目録』第二十一集(昭和四十八年)

に納めた萩原家文書の本体部分に当

るものである。萩原氏は、旗本久永

氏(高二千二百石)の陣屋役人を近

世後期に勤めおよそ給米五〇俵前後

を領し、時には、江戸久永邸へ出仕し

て、中小姓・用人・年寄にも列してい

る。特に久永氏知行地支配の要に位

置させられた関係から、近世後期の

旗本の財政についての第一次的な史

料に恵まれている。文書の時期的な

中心は文化(嘉永)であるが、文書の

構成は、当館所蔵分とそのまま共通

するものが多いので、詳しくは前記

史料目録を参照されたい。今回の収

録は、久永氏の自筆日記(寛政、天

保、断続あり)を中心として、文化・

経営についての帳簿などを行った。

その他、江戸久永氏と陣屋役人との

間の大量の用状は、知行所支配の詳

細に及ぶ貴重なもの(そのごく一部

は、当館にも所蔵されている)である

が、収録の技術的な理由などで将来

に期することにした。(現蔵者)群馬

県佐波郡東村大字東小保方二五一四

ノ一 萩原信之氏。収録点数全一〇三

冊。五リール—三、一六四コマ)

越前国丹生郡 千穂家文書

本文書は、現在福井県立図書館に

寄託されているが、現蔵者は千秋鶴

夫氏(丹生郡朝日町)である。

千穂家は代々間部主膳正領分(鯖

江藩)の乙坂組大庄屋(千穂鶴兵衛)

をつとめた家である。乙坂組は鯖江

より越前海岸に向う中間の農村地帯

で、街道に面している宿場も含まれ

ている。組内は乙坂・市・持明寺・丹

生郷・横根・上大虫・下大虫・鵜谷

・風巻・小羽・下系生・上系生・真

木・三留の十四か村であるが、千秋

家には大庄屋日記をはじめとして宗

門改帳・土地・貢租関係史料と、家

の経営に関する史料(小作帳など)

も若干所蔵されている。

今回マイクロフィルムに収めた文

庄屋御用留五〇冊と幕末の各村宗門

改帳五〇冊であるが、当館に乙坂組

内の上系生村庄屋文書が収蔵されて

いる関係上、とくに関係文書として

予算の範囲内で収録したものである。

とくに御用留日記は、大庄屋の職務

上の仕事が間断なく書きつがれ、記

載内容も村方の願・届書をはじめと

して年貢の割付に至るまで、村政全

般を網羅する利用価値の高いもので

ある。(収録点数一〇〇冊。一三リ

ール—七、一二八コマ)

河内国 竹内家文書

本文書は、昨年度実施した史料収集

の継続分である。現在大阪府枚方市

役所内枚方市史編さん室に寄託され

ている。今回も前回同様の御好意を

いただいた関係者各位に感謝を申し

げる。

甲斐田村は高五七九石余で、竹内

家は庄屋を勤めており、高五石余の

片鉾村の庄屋を兼帯している。

内容は助郷関係として、大助郷永

用帳、差付帳、高付帳、御用留の他

に助郷内綱引内助入足、加助郷願、

助郷入用などの関係がある。

貢租関係としては、免割帳、厘付

帳、請取通、御米場御入用御下ヶ願、

見、耕地切高反別書上、綿作、未進人別勘定、拾分一先納、御陣屋入用、村入用、拝借銀、惠民録銀割などの関係である。

年代は元禄七年から明治四年に及ぶが、化政期以降が纏っている。

なお今回収録したものではないが本文書の一部が「枚方市史」七、八巻に記載されている（現蔵者大阪府枚方市甲斐田町二五番地六号 竹内俊男氏。収録点数一七九冊。六リール二三九四コマ）。

河内国 小原家文書 交野郡野村

本文書は昨年度収集の小原家文書の継続分である。小原家は高一八五石余の野村の庄屋を勤めている。

今回収録した文書の内訳は途中欠年分があるが、御触書留の宝永二年—文化八年、御公儀触状留の正徳四年—天明九年、御地頭様御触状留の宝暦九年—寛政七年、御仕置五人組帳の宝永二年—寛政三年、他は諸願書、売券、見分願、池普請等の書付である。なお今回収録分ではないが本文書の一部は「枚方市史」六、八巻に収載されている（現蔵者枚方市大字野五一四番地 小原栄一郎氏。収録点数一〇二冊一〇六通 五リール 二九〇二コマ）

彙

報

○昭和四八年度事業（その二）

一、史料の収集

出雲国松江松平家（松江藩主）文書の追加分を購入したほか、京都最上屋喜八家文書、京都嵯峨川家文書、千葉県船橋市岡家谷文書、群馬県沼田市所蔵上岐氏家中山緒書、上野国東小保方村萩原家文書、越前国鯖江藩乙坂組大庄屋千亀家文書、河内国交野郡甲斐田村竹内家文書、同郡野村小原家文書などのマイクロフィルムによる収集を行なった。なお最後の二件は昨年度よりの継続分である（別掲新収史料紹介参照）。

二、定期刊行物の発行

1 『史料館所蔵史料目録』第二十三巻に「近江国蒲生郡鏡村玉尾家文書」（在方穀物魚肥商人）約二七〇〇点を収録。

2 『史料館研究紀要』第七号

収録論文は次のとおり。
藤村潤一郎
通日雇について
幕府勘定所勝手方記録の体系
幕府財政史料の類型論序説（その三）——大野 瑞男
編み袋の諸形態、用具論的に
中村俊竜智

3 『史料館報』第二十号（本号）

三、近世史料の所在調査

大阪府立大学教授森杉夫氏の協力をえて、枚方市など大阪府下の史料目録の収集を実施した。

○評議員会

昭和四八年一月八日、国文学研究資料館評議員会議の史料館部会会議が開かれ、史料館の管理運営の概況、本年度事業の進行状況、明年度の事業計画、同概算要求等、その他について評議が行なわれた。

○昭和四八年度文部省科学研究費の交付

◇一般研究（D）

飛脚問屋の研究 藤村潤一郎

◇奨励研究（A）

長州藩討幕派形成過程の研究

——豪農と村落の視角から——

井上 勝生

閲覧業務停止のお知らせ

書庫内煙草の実施にともない、左記の期間の閲覧業務を停止する予定です。でお知らせいたします。

五月二五日（土）から同二九日（木）まで

第二十回（昭和四九年度）近世史料

取扱講習会の実施予定について

今のところ左記のことが内定しています。詳細はおつて大学・地方公共団体などを通じて連絡いたします。

第一会場 仙台市 九月

第二会場 東京都 一〇月

◇編集後記◇

昨年末以来のインフレ状況の中で、ご多分にもれず当館も経費の値上がりに苦しみ、ついに本号は八頁に減頁のやむなきに至りました。各位の御賢察をお願いいたします。

しかし、本号には色川大吉先生の玉稿をいただくことができ、これを契機に史料保存と研究との係わり合いについて論議が生まれるものと期待しております。ご多忙中ご執筆下さった先生に御礼申し上げます。

前々から新築に伴う史料の閲覧制限についてお知らせいたしておりましたが、残念ながら今日現在でも、来年度いつどのように増改築が行なわれるのか確報できません。当館所蔵史料の利用をご予定の方は早めに当館へご連絡下さるようお願いいたします。

史料館報 第二〇号

昭和四九年三月二〇日発行

編集・発行

東京都品川区豊町一ノ六ノ三

国文学研究資料館内

国立史料館

電話（七八三九）〇六六代

印刷所

三恵出版印刷株式会社

東京都千代田区神田錦糸町二

電話（六六一）一四四三番